

## お墓の前に応接セット、ベンチがある

第9回で大賞を受賞した静岡県榛原郡の菊池 進吾さん(当時 28歳)のお墓は、亡くなった父親が最も愛着をもっていた自宅の居間、豪華な応接セットを忠実に石で再現している。革張りのソファが置かれ、テーブルがある。梱包会社を創業し、50代で亡くなった父親のために、息子が一生懸命に作ったお墓だ。あの世に逝った父親と家族や友人が、お墓の前で生きていた時と同じようにゆっくりと語り合える応接ソファ付きお墓。



第16回で入選した北海道旭川市の北田 博義さんのお墓は、花びらの形のお墓で、ペットと一緒にのお墓。北田さんは、妻が亡くなり、娘と相談しながら建てました。当初より「他の人と同じお墓は絶対にいや」という希望を持っていました。「いつも笑っていた、花のようなやさしいイメージ」の妻を彷彿させるお墓を、と娘と意見が一致。墓石は花びらが開いているイメージで花そのものです。お墓参りでゆったり語り合えるようにベンチとスツールを設けましたが、ベンチの背もたれは双葉、2個のスツール(イス)はひまわりの花をモチーフにしています。



第17回で入賞した北海道雨竜郡の成瀬 勝幸さんのお墓は、しばらくその場にず〜っと居て、語り合えるお墓。成瀬さんは「明るく、優しく出迎え、しばらくその場にず〜っと居て、語り合える」そんなお墓を建てたいと長く思っていた、という。お参りにみえても、手を合わせてすぐに帰ってしまうような、そんななんとなくどこか淋しい感じのお墓参りでは味気ない。そこで考えたのが、入口に、幸せを呼んでくれそうな「フクロウ」がお出迎えして、お墓にはいつまでも優しく咲き続けてくれるブロンズの花。子をいたわる母の姿を表す母と子の像を設置、敷地の角隅には人工芝やテーブル、ベンチを配置したガーデニング調のお庭を設けました。ゆっくりおしゃべりをし、くつろげる憩いのスペースに仕上がりました。亡くなったご先祖さま達や、今の家族のことを語

り合える、家族の絆を深める場でもあります。



第 17 回には福岡県大川市の N さん(匿名希望)の広くゆったりした敷地に低木があり、ベンチがあるお墓が入賞した。お墓の敷地には、家族の好きな樹木を植えたいと思ってお寺に相談しました。お寺のご住職からは、墓地が 15 m<sup>2</sup>(3m×5m)と広いので、周りの墓石に影響のないものであれば構わないといわれました。そこで「店と相談、3本の石柱、ベンチなどを配し、全体を広くゆったりとした感じのデザインにしました。3本の墓石は炭や木質系燃料を扱う仕事柄、炭をイメージした黒御影の石柱としました。樹木はヤマボウシ、サルスベリ、アゼリア、ドウダンツツジ、タマリユウ



などの低木を植えました。樹木や季節の花に囲まれ、ミニ庭園にいるような、落ち着けるお墓になったと思っています。

第 18 回には山形県長井市の金田隆彦さん（当時 41 歳）のお墓が入賞した。広い敷地をいかしのびのびとしている。点在していた個人墓をひとつにまとめたもので、将来のことを考え特定の宗教や思想にとらわれない、できるだけニュートラルなデザインにした。シンプルなデザインで、白砂利が敷き詰められた墓前で憩えるようにと長いベンチも配している。以前はお盆にしか行くことのなかったお墓に、日常的に訪れて線香を上げるようになりました、と金田さん。



同じく第 18 回に入賞した宮城県仙台市泉区の黒崎 政勝さん（当時 62 歳）

のお墓は、見ただけでも安らげて和らぐ感じの墓に、両サイドにベンチが配してある。私共夫婦はまだ元気に暮していますが、健康な内にといいことで、いずれお世話になる墓のことについて二人で話し合っていました。生前に自分の墓を作って確認しておこうという結論になり、どうせ作るなら世間一般の墓と違った、見ただけでも安らげて和らぐ感じの墓をと考え思っていました。



そんな時に紹介された墓石屋さんと、じっくり相談しながら話を進めて参りました。その結果、私共夫婦の考えていたイメージ通りのデザインに設計していただき感激でした。正面中心の部分の墓石に大きな文字で「心」と刻んでいただき、両サイドの石は将来墓参して戴いた皆様に気楽に腰を休めていただいで、私達の有りし日の思い出を語っていただければと思っています。

第 21 回には神奈川県川崎市宮前区の朝倉 志津枝さん（当時 58 歳）がベンチ付きが入賞した。このお墓を建てるまでに、川崎市営を申し込み 10 年がかりでやっと当選しました。6 m<sup>2</sup>ととても広いお墓なので、色々と悩みました。お墓までは、車イスでも行けるように平らにしてすべり止めをつくり、チョットやすめるようにベンチも作り、その下にお掃除道具を収納して「います。

